
やみいも！

?だ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やみいも！

【コード】

N1998V

【作者名】

？だ

【あらすじ】

高校入学式からもう変わっていったのかもしれない。

あの時しっかりしていれば……

やみいも！（前書き）

はじめまして。

アシタカヒコです。

これからよろしくお願いします。

はじまりの朝（前書き）

「自分や自分の作品を退屈だと感じさせる勇気を持たないものは、
藝術家であれ、学者であれ、ともかく一流の人物ではない」

BY二一チエ

はじまりの朝

俺の部屋

チュンチュン…チュン

鳥の鳴く声が聞こえてきた…朝か……

ドタドタドタ…ガチャ

「お兄ちゃん、朝だよー。起きてー。」

ドシッ

「グフッ……」

「むふふー。あつたかいなー。お兄ちゃんのベッドは。」

今起こしに飛びかかってきたのは紗季^{（紗）}。

俺…鷹島湧哉^{（たかしまゆうや）}の妹だ。

容姿の説明をさせてもらうと黒のセミロングでかわいい方だと思っ。

俺は茶髪の短髪で普通の新高校生。ちなみに妹は中学2年生。

「…お兄ちゃん？お腹に何か当たってるよ？」

「なっ！なんでもない！！気にするな」

「まあいいや。ご飯できてるから、はやく降りてきてね。」

「ああ。」

ふう…

朝から騒がしいやつだ。

兄としてはもう少しおしとやかに思ってほしいと思う。

まあ、それはさておき今日は高校の入学式。気合い入れていかな
いと。

「よし、準備するか」

そう呟いてリビングに向かった

リビング

「あつ、お兄ちゃん！おはよう。」

「おう、おはよう。」

うちの家庭には両親はいない。二人とも海外赴任している。だから
二人で暮らしている。

「今日からお兄ちゃんは高校生かー。せっかく同じ中学に行ったの
に、なんだかなー……。」

そう言っつて紗季は悲しそうな顔した。

「仕方ねーだろ。そう落ち込むなよ。学校なんてすぐ終わるんだか
らさ。」

「むー。」

子供みたいに膨れっ面をする紗季はまた一段と可愛く見える

そんな納得のいかなさそうな紗季をおいて俺は学校に向かうとした。

「それじゃあ行ってくるから。ちゃんと戸締まりしてから学校行けよー。」

「はい。」

はじまりの朝（後書き）

引き続きよろしく願いします。

誤字脱字などあったらいつていただければありがたいです。

入学式（前書き）

どもアシタカヒコです。

私、麻雀をたしなみます。

どーでもいいですね。はい。笑

入学式

学校

「よっ、湧哉。久しぶりだな。元気してたか？」

元気に挨拶してきた男は昔からの悪友 矢田拓斗^{やだたくと}。

「高校でも同じクラスとは…。お前とはつくづく縁があるな。」

そう、拓斗とは小学生からの腐れ縁でいつも同じクラスなのだ。

「湧哉だけじゃないでしょ。わたしとも付き合いながいじゃない。」

俺達の会話に割って入ってきたのは中学からの仲である矢吹美帆^{やぶきみほ}。

この二人が中学でのいつもつるむメンバーだ。

「高校生になっても、これじゃあ中学の頃とは何も変わらないな。」

拓斗は呆れた風に言った。

「まあ、いいじゃねーか。楽しいんだし。」

そんな風にいつものメンバーと過ごし入学式に向かった。

体育館

「…これより入学式を始める。………」

入学式が始まって、長い校長先生の話も終わりがけた頃合いに、
「最後に在学生代表からの話。」

先生がそう言うのと奥から口では表せない程綺麗な生徒が現れた。名前は（神条皐しんじょうさつき）。後から聞いた話だと3年の中で常に成績トップを維持しているらしい。さらに剣道部で全国にいく程の腕前だと。文武両道という言葉が一番似合う人だ。

「えー、生徒会会長の神条皐だ。よろしく。今日から皆、風鈴学園の生徒だ。風鈴の名を背負って日々精進するように。以上だ。」

ふー、思ったよりあっさりしてて助かったぜ。しかし、何でも出来るんだな。高嶺の存在って感じだな。

廊下

今日は授業はないから後は教材やらをもらって帰るだけか。

そう思ってた矢先に……

ドカッ ドシッ

「ああ！すいません！不注意でした！すいません！」
倒れた少女は見上げながら言う。

「いや、こちらこそごめん。大丈夫？」

「はっ、はい！！大丈夫です！」

「そう良かった。」

丁寧に謝ってきた女の子は来栖夏菜^{くるすかな}。

…何で知ってるかって…紳士のたしなみさ…。

来栖さんは茶髪のセミロングで見た目的には運動音痴でドジそうな雰囲気だ。

「とりあえず教室に行こうか。」

「は…はい…！」

と来栖さんが立ち上がろうとした時、

「いたっ！」

どうやら挫いたみたいだ。保健室に連れていった方がいいかもしれない。何かあったら一大事だ。

俺は少し屈んで、

「ほら、背中に乗って。」

と言った。

「えっ、でも……。」

何を遠慮しているんだ。歩けなさそうなくせして。

「いいから。」

来栖さんは申し訳なさそうにはいと答えた。

入学式（後書き）

早くて一日以内に

遅くて一週間以内に

更新するつもりです。

な訳で軽い気持ちでちょっと寄るかぐらいの感じをお願いします。

保健室で

保健室

来栖さんを保健室に連れてきたけど保健室の先生はいないようだ。

仕方ない。素人なりに応急手当を施しておくでしょう。

「来栖さん。とりあえず今から氷袋とタオル持ってくるからそれで痛むところを冷やしといて。」

「うん。ありがとう。」

……

……

無言の沈黙が続いた。

怒っているんだろうか。

そりゃそうか。わざとではないにしても怪我をさせてしまったのだから……。一応もう一度謝っておこう……。

「「あ、あの……」「」

やってしまった。なんともベタなことを。しかしどうする。譲るべき……だよな……。

「先言つて。」

譲った。

来栖さんは先程のことを恥ずかしそうにしながら、

「あの…、すいませんでした。自分からぶつかって勝手に怪我しただけなのに…。…その…迷惑でしたよね。ホントすいません。」

「なにいつてんだよ。困った人を助けたただけだ。感謝される筋合いはあっても、謝られる筋合いはない。」

それでも彼女は申し訳なさそうに、

「…そうですね。すいません。昔から引っ込み思案で人付き合いも上手いかわなくて…。」

そう言うと彼女はうつむいてしまった。

どうにかしてやりたいと思ってしまった。普段からそういう性格でいつも周りより損ばかりしてきた。だからこれからはやめようと思っただけなのに、やっぱりそうはできないみたいだ。性分ってやつかな。だから、

「これから直していこう。俺も手伝うから。なっ、来栖さん。よろしくな。」

「はっ、はい。」

「それじゃあ、俺は教室戻るから。」

そう言って俺は教室に向かった。

教室

教室に戻ると皆席についているものすごく注目を浴びてしまった。

そして、教材を配られ先生が色々と諸注意を言って解散となった。

帰ろうとした瞬間拓斗が近づいてきて突然、

「おまえあの娘とどうなったんだよ。襲ったのか？」

などとふざけたことをぬかすので一発殴つといた。

「いてーな。なにしゃがる。」

「お前が変なこと言うからだろ。」

「まあいい。で、どーなったんだ？あの娘との関係は。」

「もう一発殴つといた方がいいか？」

「おいおい！！まてまて！！別に変な意味でいってんじゃないよ。」

「私にも聞かせてよ。その話。」

いつの間にか美帆までやって来た。

「別になんもなかったよ。ただしは仲良くなれたかなって。」

「そっか。」

「じゃー、帰るか。」

「そだね。」

「お。お。」

そうして、みんなが帰った

疑い

家

玄関開けると、

「お兄ちゃんーん、お帰りー。」

妹がダイビング。

俺は妹を抱き抱えて尻餅をついてしまった。

「はう。寂しかったよ。くんかくんか。」

全身に衝撃が走るほどのブロンズぶりを見せられてしまった。紗季がこんな風になるのは何年ぶりだろうか。確か俺が中学生になった時だったはず。

「落ち着け紗季。とりあえずどいてくれ。」

……。

「おい、紗季。きいてるのか。」

「お兄ちゃん？なんでお兄ちゃんからお兄ちゃんじゃない匂いがするのかな？」

さっきまでとはなんだか雰囲気が違う。

「み、美帆のдар。今日あったし。」

「違うよ。美帆ちゃんとは違う。それにいつもより匂いが濃い。」

まるで密着したかのような……。」

っ！！なぜそこまでわかるんだこいつ。警察犬かなんかか。

「何で黙るの？ねえ？…ねえ？」

紗季は俺が女が絡むとたまにこうなる。兄思いなのはいいが、そろそろ卒業してほしいもんだ。

「わかったよ。言い訳させてくれ。」

紗季に今日あった出来事を話した。はじめは毛が逆立つぐらい怒っていたが話が進むにつれおとなしくなってきた。

「そう。別にその女とはなんもなかったんだね。そう。でも、気を付けてね。そう言う女は基本お兄ちゃんの優しさに漬け込んで騙してくるんだからね。」

「大丈夫だって。そんな娘には見えなかったし。」

「あまい！世の中を甘くみないで！」

「わかってるって。」

「むう。…お兄ちゃんになにかあったら私は……………」

「ん、何か言ったか。」

「いや、なにも。さ、ご飯食べよ。」

その後、一緒にご飯食べて寝ることになった。

紗季の気持ち

出発前

紗季 side

お兄ちゃん大丈夫かな。お兄ちゃんはおつちよこちよいだから心配だよ。高校生にもなったらお兄ちゃんに色目つかう雌豚とかいるかもしれないし。どうしよう。目をはなしたすきにお兄ちゃんがいなくなったら……。大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな。お兄ちゃんには私がいないとダメなんだから。私が……。私が……。

帰宅後

やっぱり。お兄ちゃんにつく悪い虫がいたみたいだ。許せない。お兄ちゃんの純情を弄ぼうだなんて。そりゃあ、お兄ちゃんが優しすぎるのも悪いんだけど。とりあえずその女には絶対に好きにはさせない。私のお兄ちゃん、お兄ちゃんは私がまもってあげるんだから。たとえだれであろうとも……。かならず……。

勧誘（前書き）

先日、凄い巨乳を見かけました。

バストアップブラを着けていたとしてもあれはデカイ。

まあ、自分は貧乳派かな。

勧誘

学校

今日は朝紗季にまた注意を受けそうになったので早めに家を出た。だから一番乗りだと思っていたが教室には来栖さんが先に席についていた。

「おはよう。」

「お、おはようございます。」

「来栖さんは中学の頃もこんな早くに学校にきているの？」

「朝早くに起きてしまうので。鷹島くんもですか？」

「いや、今日はたまたま。」

「そうですね。」

.....。

教室の中二人つきりで無言はきついなあ。なにか話題とかあればいいんだけど、昨日知り合ったばかりで何が好きなのかもわからない。...いや、まてよ。好きなものを聞けばいいのか。

「あのさ、来栖さんは...」
ボタン

話しかけようとした途端ドアが思いつきり開かれた。ドアを開いた人物は意外にも生徒会長の神条臯さんだった。

何故生徒会長が…と思っていたら、神条さんが突然

「よし、お前たち生徒会にはいれ。」

え——————！！！！
いきなりなに言い出すんだこの人は。生徒会に？なんでだよ。なんの脈絡もないよ。

「何故ですか？」

俺より冷静な来栖さんがそう問いかけた。

「理由は三つほどあるかな…。一つ目は学校に一時間以上も早くに来ていたこと。二つ目は昔からの伝統だ。あと最後に君たちは見込みがありそうだ。」

伝統？なんだそれは？

「伝統って…」

「私もよく知らない。ただ…入学式の次の日の朝早くに教室にいるものを生徒会にいれるそうだ。」

ワケがわからないがなと生徒会長は続けた。

ということはたまたま朝早くに来てしまった俺たちがとばかりを受けてしまったってわけか。

しかし、そんなヘンテコな伝統を真面目にこなすなんてさすが会長

だ。と尊敬していたら、

「嘘だ。伝統なんていったが実は私が勝手に決めたのだ。」

嘘！？今の俺の気持ちを返せ！無茶苦茶だ！

「一体なぜ？」

「私なりに考えたのだぞ。生徒会は朝が早いからな。遅刻するようじゃ話にならん。それに人員不足なんだ。」

要は適当に理由をつけて、人を増やそうとしたということか。

「別に無理して入ってくれなくてもいい。無茶苦茶いつているのは自分でもわかっていているからな。だがもし気が向いたらいつでもきてくれ。」

そう言うと、残念な顔をして帰ろうとした。

「待ってください！私なんかで力になれるなら入ります。いえ、入れてください。」

「本当か！？ありがとう！」

会長は途端にパツと明るくなった。よほど嬉しかったせいか、顔が紅潮している。

しかしあの来栖さんが自分から入るなんて。いや、来栖さんがどんな人かなんてまだまだ知らないからこれは俺のただの偏見なんだが、あまり積極的な方には見えない。

「君はどうだ。入ってくれないか？」

「えっ！？俺は……」

会長の目がキラキラと輝いている。

(断ろうにも断れない……)

「わかりました。入ります。だけど大したことはできませんよ。」

「大丈夫だ。私が教えてやる。安心しろ。……それとありがとう。」

「っ！？」

紅潮したままの可愛い笑顔を向けられてこちらの顔も赤くなってしまう。自分でもすごく火照っているのがわかる。

「それでは放課後、生徒会室にきてくれ。」

そう言ってさっきとは違って変わって帰っていった。

予想外にも登校二日目で生徒会役員になってしまった。

勧誘（後書き）

改行一回ぶんしか間を空けていないのですが見づらかったらレビューしてください。

二行ぶんにするので。

ツン？（前書き）

スカートで自転車って最高だともう。

坂をかけ降りるときのふわり感が。

えっちなのはいけないと思います。

だんだん作者の変態ぶりが露になってますね。すいません。

ツン？

昼休み

「「ええっ!？」」

生徒会に入ったことを二人に伝えたら予想通り驚かれた。

「なんで？」

「今生徒会は人数が少なくて人手が必要らしいんだ。だから…ね。」

「ね…って。まって。なんであんなのよ。」

どうしても納得がいかない美帆は次々と質問をしてきた。質問の度にだんだんイライラしているように見える。

「たまたまだよ。俺と来栖さんが偶然生徒会長に会ったから誘われただけ。」

「…偶然？」

「そう。」

「生徒会かぁ。神条さん目当てのやつが多いから気を付けろよ。」

拓斗がいきなり意味深な発言をした。

「気を付けるって、何を。」

「ファンにだよ。普通会長の招待がなければ入れないんだ。だけど、お前は生徒会に入った。憎まれても仕方がないだろ。」

会長の招待？そんなものがあるのか。というより入りたいやつがいるのか。なのに…人不足？

「なんで俺が？」

「さあな。そんぐらい自分で考えな。」

なぜだろう…。また今度機会があれば聞くとするか。

「それよりさ、なんでさつきから美帆は怒ってるんだよ？」

「怒ってなんかないわよ！あんたが生徒会に入るかなんて私には関係ないし！」

どうしたというんだ。まったく、わけがわからないよ。

「美帆は湧也といる時間が減って寂しいんだよ。」

拓斗がニヤニヤしながら茶々をいれてきた。

「だっ、だれが！？そんなわけないじゃない！」

それに対して美帆は顔を真っ赤にして否定する。

拓斗と美帆が口論をしているとチャイムが鳴ったので二人とも自分の席に帰っていった。

ツン？（後書き）

お気に入り登録してくれてありがとうございます。

まだちょっとですが頑張っていきます。

今のところ2日に1話のペースです。この調子で続けます。

ハハ……誰にも私の邪魔なんかさせない。」

終幕（後書き）

今まで愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998v/>

やみいも！

2011年10月10日12時33分発行